

# 異文化適応における追跡研究の意義と課題 — 帰国子女を例に —

羽下 飛鳥、松島 恭子

大阪市立大学大学院 生活科学研究科

## Significance and Problems of Follow-up Study in Cross-cultural Adaptation

Asuka HAGE and Kyouko MATSUSIMA

*Graduate School of Human Life Science, Osaka City University*

### Summary

The purpose of this study was to review researches on cross-cultural adaptation, and to suggest the importance and the problem for researches in the future. Returnees seem to be a good example when we think about cross-cultural adaptation. So in this paper, we reviewed studies about returnee's adaptation as an example.

This study suggests that although there are so many problems about the way of collecting subjects and analysis, there still remain many possibilities about giving us other viewpoints about cross-cultural adaptation.

**Keywords:** 異文化適応 追跡研究 帰国子女

*Cross-cultural Adaptation, Follow-up study, Returnees*

### 1 問題と目的

人は発達の過程で様々な異文化に接する。同じ日本人といってもその文化背景は様々である。そして、家族、地域、社会で出会う何に異文化を感じるかは人それぞれである。青年文化に触れた成人は、かつて自分がそこに属していたとしても異文化だと感じるであろうし、国内での転居によっても、異文化を感じる人もいる。この意味で、人の一生は常に何らかの異文化適応をし続けるといえる。しかし、異文化の最たるものとしてはやはり国と国との違いがある。帰国子女は、複数の国に在住経験を持つ。そのため、異文化的状況において、人がどのように適応していくかについて考える上で、よい材料になると思われる。

羽下・松島 (2003)<sup>1)</sup>は「帰国子女」への調査を通して、内面的な適応には帰国後の社会のまなざしが大きく影響

すること、また、帰国後の経過年数の方が、外国での滞在期間よりも適応に影響していることを明らかにした。このことから、異文化適応を考える際には、適応を長いスパンで考えることが必要であると考えられる。

そこで、本論文では、内面的適応に関する領域を中心として、これまで行われてきた帰国子女の追跡研究を概観し、その意義と課題を明らかにし、今後の研究を促すことを目的とする。

### 2 主要な先行研究

帰国子女の追跡研究には、何を追跡しようとするかによって、様々な種類のものがある。例えば外国語や日本語の能力の発達を追跡したものや小野 (1988)<sup>2)</sup>や、帰国子女受け入れ教育の効果を追跡したものである。しかしそれらは、旧文部省における帰国子女の定義を受け

て、帰国後3年以内に限ったものが多かった。

そこで本論文では、内面的適応という観点からみでの追跡研究に絞って考察する。

帰国子女研究が盛んになった1970年代以後の研究において必ず参照される研究に、箕浦の研究があげられる。箕浦は、1978年から1981年にかけてロサンゼルスに滞在したこどもたちに対して面接調査を行った。そしておおむね9歳から15歳までを「臨界期」と名づけ、この時期をその社会における意味体系の感受期であるとし、この時期を越えて帰国した者は、適応が困難になる可能性があるとして述べている。現在までの帰国子女の追跡研究はこの箕浦の言う「臨界期」に着目したものが多く、適応に関する要因分析や因果関係などについて検討した研究はないような状況である<sup>3)</sup>。

箕浦はその後10年の追跡調査において、海外で成長した人が、日本に帰国して後、「在外地の文化と自国の文化の二つの意味体系の狭間であって、自らの生きる世界を」どのようにして構築していったかということを中心において、75人に対して象徴的相互作用論の立場から面接を行った。そして臨界期を越えて帰国した者は、両文化の違いから衝突や葛藤を経験し、意味体系の再編成に困難を伴うことも多いことを述べた。一方で、臨界期内に帰国した者は、おおむね日本の意味体系を容易に受け入れることができる、としている。しかし、意味体系の違いを感じなかったものもいることから、個人差の大きさや、在外地の意味体系がどの程度自我親和的になっていたかにも規定されるとしている<sup>4)</sup>。

ニエカワ(1986)<sup>5)</sup>は、成人した帰国子女に対して、かつての海外経験の痕跡を探ろうと面接を行っている。被験者は22人である。調査への協力を拒む人が男性に多かったとしている。協力を拒む理由は「今更あの苦しい時代のことを思い出したくない」というものである。このニエカワの研究がそれ以前の研究と異なる点は、被験者の選定にある。帰国直後の帰国子女を被験者とする従来の研究に対して、帰国直後の問題(学校場面での不適応など)を通りぬけたと思われる成人を被験者を選び、被験者本人にその経験を再検討してもらったところに特徴がある。このニエカワの研究により、帰国子女の適応をより長い期間をもって見て行こうという視点が導入されたといえる。

ニエカワは箕浦の言う「臨界期」を狭い意味に取り、「臨界期」に海外滞在経験のない人には異文化体験の影響は残らないという解釈に基づいて、これを検討しようと面接を行っている。その結果、臨界期を外国で過ごしていない帰国子女にも異文化体験の影響は残っていると結論

づけた。さらに、異文化体験の影響は、帰国後に体験を振り返り、再検討することで解釈が変わっていき、異文化体験の影響は続く、としている。

ニエカワによって、海外経験の長期的影響を、面接調査によって明らかにしようという研究が増えた。

例えば、巖(1987)<sup>6)</sup>は20～30代の帰国子女を対象としライフ・ヒストリーの聞き取りという形で聞き取り調査を行い、適応を自らの異文化体験を周囲に対してどのように位置づけるかによって「削り取り型」、「付け足し型」、「自律型」の3類型に分けている。

中西ら(1988)<sup>7)</sup>も帰国後、一定年数がたち、社会人となった帰国子女たち10名を追跡し、異文化体験の影響は帰国後多年が経過してもそれぞれにとって「なんらかの意味を持っている」としている。また「むしろ帰国後一定期間を過ごしたことにより、海外経験をし、受けてきた影響は、表面的に見てとれるものというより一人ひとりの生活、人生、あるいは人格の中で『エッセンス』のようなものとなって残っていると思われる。(p.60)」と述べている。

また、原(1990)<sup>8)</sup>は、第二次世界大戦前から帰国子女受け入れ教育を行っていた東洋英和女学院の卒業生を対象に、追跡面接調査を行っている。対象になったのは、昭和12年から17年にかけて在学していた6名で、平均7年10ヶ月の海外在住経験を持っている。帰国後半世紀以上たった時点での調査であるが、全員が異文化体験の影響について言及し、自分の人格形成に対して肯定的な役割を果たしたと捉えていた。しかし、帰国後長年(具体的にどのくらいかについては記述がない)の間、日本人の思考・習慣・行動様式に慣れずに苦労した経験から、自分の子どもについては日本で教育を受けさせた人や、結婚相手に海外赴任のない人、という条件をつけた人もいた。原は帰国後の適応を「自文化復帰体験」と呼んでいるが、これを否定的に捉えている人と、肯定的な人が出る理由を箕浦の「臨界期」概念を使って説明しようとしている。すなわち、「臨界期」を海外で過ごした人は、その地の文化体系により親和性が高くなるので、日本への文化体系になじむことが難しくなり、逆に「臨界期」に日本に帰国した人は、日本の文化体系になじむようになるということである。原(1990, 1993)<sup>9) 10)</sup>は続いての研究で、異文化体験がその後の生活の軌跡(ライフコース)にどのような影響を与えたかについても聞き取り調査によって、追跡研究を行っている。対象者は、同じ学院の卒業生だが、第二次世界大戦勃発以前の卒業生と、戦後の卒業生を対象を移し、それぞれコーホートとして共通性を探ろうとしている。外面的な適応という

意味では全員が現役で仕事を持っていた。一方、異文化体験の影響で自立性や独立性が育ったと感じている人も多かった。しかし、「日本人になりきれない部分がある」というように、内的な適応に関しては、帰国後半世紀以上たっても影響が続くという面も明らかになっている。第二次世界大戦の影響を強く受け、戦中は「敵国人」と敵視されながらも、戦後は外国語ができるということで待遇が一変した人も多く、これも異文化体験で得た語学力の影響での、ライフコースの変化と見ることができる。

一連の研究の結果、原(1998)<sup>11)</sup>は「異文化体験の影響・及び痕跡は、その後の個人の人格形成に深くかかわっている」と結論づけている。

竹田(2000)<sup>12)</sup>も同じく帰国子女のライフコースに興味を持ち、個人の異文化体験の意味づけが、様々なライフコースの選択に影響していると考え、面接調査を行った。その結果、ライフコース選択において、重要な役割を果たす人(コンボイ)に注目し、在外中に構築したコンボイネットワークを帰国後どの程度維持するかが、ライフコースの選択に影響するとした。

小野田(1998)<sup>13)</sup>も海外経験の長期に及ぶ影響を帰国後の経過を追うことによって捉えようとしている。小野田は海外経験が人間の文化的同一性の形成に影響するとし、アンケート調査を行った中から追跡が可能だった46人に対して、半構造化された面接を行っている。小野田は、複数の文化に触れて育つという意味では帰国子女も少数民族も共通しているとして、少数民族の直面する文化的葛藤の発達過程を研究したクロスの意識段階説を援用している。結果として異文化体験を肯定的に捉えている者が多いとしている。

これらの研究は、面接者と被面接者が一対一であることが特徴である。このことを批判し、方法に工夫をしたのが阿部・千年(2001)<sup>14)</sup>の研究である。

阿部・千年(2001)の研究では、フォーカス・グループ・ディスカッション(以下FGDと省略)という方法を用い、帰国後、一定期間を置いた「元帰国生」たちに面接調査を試みている。FGDとは、「少人数で構成されたグループで討論を行う質的調査法の一つ(p.9)」であり、この方法を用いると、以下のような利点があるとしている。一つは、同じような経験を持った人を集めることができるために、一対一の面接よりも話しやすい雰囲気が作られ、話すテーマも広がりが出ることである。もう一つには、発言はディスカッションの文脈に沿って行われるために、発言内容を研究者が間違っず解釈するという危険性が減るということである。しかしながら結果は一般化を目指すものではないとしている。

参加者は18歳から43歳の男女で、平均の帰国後年数は17.6年だった。

分析はFGBの議事録から行っており、社会に適応するための戦略と適応タイプを析出した。適応戦略は、できるだけ早く適応しようとする「同化戦略」、帰国子女のステレオタイプに合わせようとする「キコク・戦略」、そのどちらもとらない「ノー・戦略」の三つである。適応タイプとして「キコク志向型」、「日本志向型」、「個人志向型」を上げている。適応戦略と適応タイプは必ずしも一致しない。しかし、適応タイプを規定する要因として、箕浦の言う「臨界期」に滞在していたかどうか、が関係しているのではないかとしている。

箕浦のいう「臨界期」概念は、その文化に所属しているかどうかという感覚が得られる時期を特定し、それによって適応も変わってくるということを示しているように思える。そして内的適応を考えるにあたって、どの研究も所属感ということを暗黙のうちに問題にしている。そのための準拠棒として、箕浦の「臨界期」概念は使われているようである。

### 3 帰国子女追跡研究の意義

以上の概観より、帰国子女の追跡研究には、次のような意義があると考えられる。

まず、ニエカワや、小野田の研究に見られるように、追跡研究の被験者は、帰国後年数がたっているために、児童期だけではなく、青年期、成人期にある帰国子女であることが多い。このため人間の発達段階における様々な課題—進路や職業の選択など—を、より深くとらえることができる。異文化適応という観点から発達を見ることによって、その文化に属するがために意識化しにくいものを明らかにできる可能性がある。そうすることによって小島(1990)<sup>15)</sup>も言うように、「青年期の心理的、社会的特性が考察にはいつてくる」ので「日本の青年の問題や課題に資する研究になる」と思われる。

次に、帰国子女の適応過程を検討することで、日本の中で帰国子女と似た条件を持つ集団について、援用可能な知見を得ることができると考えられる。例えば、留学生、転校生、また保護者の仕事上の都合等で、一時的に日本に在住している外国籍児童などである。彼らは、自我親和的な文化から様々な理由で移動を余儀無くされ、自我違和的な文化に身を投じるという点で帰国子女と共通している。近年増えつつある外国籍児童については、少しずつ受け入れ体制が整えられようとしているが、教育についてもまだ十分な設備が整っているとは言い難い

し、適応についてはほとんどわかっていない状態である。彼らが日本という異文化に適応していく過程において、帰国子女の適応過程が参考になるのではないだろうか。

最後に、追跡研究していく中で、個別事例に接することは、日本における異文化の受容度を長期的に知る手がかりになると考えられる。国際化時代と言われる昨今、日本における異文化受容度を知ることが重要な課題である。個別事例の中で帰国子女たちが経験した事柄の中には、彼らが気づいていなくても、当時の社会が異分子である彼らをどう見ていたかを映す出来事が述べられている。例えば、原 (1990)<sup>16)</sup>の研究の中で、教師が帰国子女クラスの担任に推薦されたが、一度担当を断っているという話題が出てくる。「外国帰りの子供は無作法で、乱暴で、手に負えない所がある (p.142)」という理由からである。これは帰国子女クラスを担当したのちに修正されていった見方であることが記述されている。これは、当時の社会が帰国子女をどのように見ていたかを垣間見ることができる資料といえる。他にもニエカワ (1986)<sup>17)</sup>の、調査を断ったのは男性が多かったなども、同じ帰国子女といっても男女で扱いが違うのではないかという問いを設定できる資料となっている。

#### 4 追跡研究の課題

一方で追跡研究には課題も多い。追跡研究では、研究の目的として海外経験の影響を明らかにすることをあげているものがほとんどである。しかし、中西ら (1988)<sup>18)</sup>も指摘するように、異文化体験の影響を受けた面のみを取り出すのは理論上不可能に近いと思われる。なぜなら時間の経過を重視する結果、あまりに多くの変数の影響を考えなければならなくなるからである。

また、サンプル数が少ないために、一般化できないのではないかという問題が常に存在する。ほぼ全ての追跡研究が、サンプル数の少なさを今後の課題としてあげている。確かにサンプル数は一定の量が必要であるというのが、定石ではある。しかし、臨床心理学的見地に立てば、量的には捉えきれない人間の生の現実を捉える試みがあってもいいのではないか。海外経験の影響を“客観的”に捉えることは難しいが、それぞれの個人が海外経験をどのように認識し、またその認識が時間的経過によってどのように再認識されたかを辿ることも必要ではないかと考える。統計的処理をほどこし、一般化することで抜け落ちてしまうものにも、異文化適応に関する情報はあのではないか。

サンプルの問題と合わせて、得られたデータの問題もある。原 (1993)<sup>19)</sup>は、過去想起法によるバイアスの

かかったデータであることが問題であるとしている。これは被験者の側のバイアスを指しているが、バイアスが かかっているのは面接者も同様である。基本的に、面接法で得られるデータにバイアスのかかかっていないものはない。そして、統計的調査においても、研究者の持つカテゴリーにあてはめて大量のデータを収集するやり方が、果たして“客観性”があり、バイアスがかかっているのかという問題がある。

その意味で、データ化の段階で、より多くの参加者による情報の調整が望める阿部・千年のFGDには、今後の研究の方向として、一つの指針となる。面接者と被面接者が一対一という状況に、第3の目が入ることで、それぞれのバイアスが和らげられることが考えられるからである。

研究者側のもう一つのバイアスとして、帰国子女の追跡研究に特徴的な点がある。ニエカワ、小野田、巖岩をはじめとして研究者に自ら幼少時に海外在住経験のある者が多いということである。なぜそうなるのかも考える必要があると思われる。小島 (1990)<sup>20)</sup>は、研究者に海外経験があつてこそ帰国子女の現実に深く関与することができると述べている。確かにそういった面もあるかもしれない。しかし、同じような経験があるから早合点したり、わかったつもりになったりしてしまう危険性もある。また、そもそもの研究動機に、海外経験からよい影響を受けた、と思いたい気持ちが強すぎないかと言う点は研究者自身で確認する必要がある。例えば原 (1993)<sup>21)</sup>は、聞き取り調査をした時の被験者たちの印象を「若々しく闊達で、自立して居り個性的」と述べているが、この辺りは多分に調査者の思い入れがあるようにも感じられる。

前述したように、異文化適応において、その異文化に移住するのか、それとも一定期間の後、元の文化に帰ってくるのかによって、適応に違いが見られると考えられる。その点で、帰って来ることが前提となっている帰国子女と、永住が前提の移民の研究との比較も必要ではないかと考えられる。

#### 5 まとめ

異文化適応に関して、帰国子女の追跡研究が果たす役割を文献調査によって明らかにしてきた。帰国子女の追跡研究は、その対象の選定の問題、方法論や調査者のバイアスなど、問題も多いが、新たな知見を提供する可能性がある。今後、さらに問題点の整理を進め、利点を生かすように研究法を発展させていくことが重要であろう。

## 引用文献 (Endnotes)

- 1) 羽下飛鳥・松島恭子：異文化体験と自己イメージの形成—帰国子女の「適応過程」の検討—, 生活科学研究誌, 2, 217-232 (2003)
- 2) 小野博：海外帰国児童・生徒の英語と日本語語彙力の変化, 異文化間教育, 3, ページ (1989)
- 3) 箕浦康子：『子どもの異文化体験』, 思索社, 106-110 (1991)
- 4) 箕浦康子：日本帰国後の海外経験の心理的再編成過程—帰国者への象徴的相互作用論アプローチ—, 社会心理学研究, 3 (2), 3-11 (1988)
- 5) ニエカワ・アグネス：成人したかつての帰国子女の過去再検討, 『バイリンガル・バイカルチュラル教育の現状と課題—在外・帰国子女教育を中心として—』, 東京学芸大学帰国子女教育センター, 183-242 (1985)
- 6) 巖谷ナオミ：「海外成長日本人」の適応における内部葛藤, 異文化間教育, 1, 67-80 (1987)
- 7) 中西晃：『青少年時代の異文化体験が人格形成に及ぼす影響』, 昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書 (1988)
- 8) 原和子：海外帰国児童生徒教育の一考察—第二次世界大戦下の帰国子女学級東洋女子学院「別科」の事例, 教育研究, 32, 135-159 (1990)
- 9) 10) 前掲  
原和子：異文化体験のライフコース分析—かつて
- 11) 原和子：異文化体験のライフコース分析—かつての「帰国子女」の追跡調査—第一部報告, 教育研究, 35, 155-172 (1993)
- 12) 原和子：異文化体験のライフコース分析—かつての「帰国子女」の追跡調査—第二部報告, 教育研究, 40, 195-232 (1998)
- 13) 竹田美和：異文化体験とライフコース第2報—帰国子女のインタビュー調査より—, 相愛女子短期大学研究論集, 47, 49-67 (2000)
- 14) 小野田エリ子：異文化体験者としての「帰国子女」—追跡面接調査より—, 異文化間教育, 2, 86-99 (1988)
- 15) 阿部彩, 千年よしみ：元帰国生の海外滞在経験の長期的影響と意義—フォーカス・グループ・ディスカッションから—, 東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要, 11, 1-20 (2001)
- 16) 小島勝：帰国子女の「追跡研究」の意義問題—最近の研究にもとづいて—, 異文化間教育, 4, 115-126 (1990)
- 17) 前掲
- 18) 前掲
- 19) 前掲
- 20) 前掲
- 21) 前掲

---

## 異文化適応における追跡研究の意義と課題 —帰国子女を例に—

羽下 飛鳥、松島 恭子

**要旨：**異文化適応に関して、帰国子女の追跡研究が果たす役割を文献調査によって明らかにしてきた。帰国子女の追跡研究は、その対象の選定の問題、方法論や調査者のバイアスなど、問題も多いが、新たな知見を提供する可能性がある。今後、さらに問題点の整理を進め、利点を生かすように研究法を発展させていくことが重要である。

